

声に出して読みましょう。

ゆきわた

雪渡り ①

みやざわけんじ
宮沢賢治

ゆきわた

雪渡り その一（小狐の紺三郎）

いち こきつね こんぎぶろう

雪がすっかり凍って大理石よりも堅くなり、空も冷たい滑らかな青い石の板で出来ているらしいのです。

「堅雪かんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまっ白に燃えて百合の匂を撒きちらし又雪をぎらぎら照らしました。

木なんかみんなザラメを掛けたように霜でぴかぴかしています。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

四郎とかん子とは小さな雪沓をはいてキツクキツクキツク、野原に出ました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

こんな面白い日おもしろ ひが、またとあるでしょうか。いつもは歩あるけない黍きびの畑はたけの中なかでも、すすきで一杯いっぱいだった野原のほらの上うえでも、すきな方ほうへどこ迄まででも行けるのです。平たいらなことはまるで一枚いちまいの板いたです。そしてそれが沢山たくさんの小さな鏡ちい ちいのようにキラキラキラ光ひかるのです。

「堅雪かたゆきかんこ、凍み雪し ゆきしんこ。」

二人ふたりは森もりの近くちかまで来きました。大おおきな柏かしわの木きは枝えだも埋うずまるくらい立派りっぱな透すきとおった氷柱つららを下さげて重おもそうに身体からだを曲まげて居おりました。

「堅雪かたゆきかんこ、凍み雪し ゆきしんこ。狐きつねの子こあ、嫁よめいほしい、ほしい。」と二人ふたりは森もりへ向むいて高たかく叫さけびました。

しばらくしばらくしいんとしましたので二人ふたりはも一度いちど叫さけぼうとして息いきをのみこんだとき森もりの中なかから

「凍み雪し ゆきしんしん、堅雪かたゆきかんかん。」

と云いいながら、キシリキシリ雪ゆきをふんで白しろい狐きつねの子こが出て来きました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

四郎は少しぎよっとしてかん子をうしろにかばって、しっ
 かり足をふんばって叫びました。

「狐こんこん白狐、お嫁ほしけりや、とってやるよ。」

すると狐がまだまるで小さいくせに銀の針のようなおひ
 げをピンと一つひねって云いました。

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、おらはお嫁はいらないよ。」
 四郎が笑って云いました。

「狐こんこん、狐の子、お嫁がいらないきや餅やろか。」
 すると狐の子も頭を二つ三つ振って面白そうに云いま
 した。

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍の団子をおれやろか。」
 かん子もあんまり面白いので四郎のうしろにかくれたま
 まそつと歌いました。

「狐こんこん狐の子、狐の団子は兎のくそ。」
 すると小狐紺三郎が笑って云いま
 した。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「いいえ、決してそんなことはありません。あなたの方がたのような立派な方が、兎の茶色の団子めなんか召しあがるもんですか。私わたしらは全体ぜんたいいままで人ひとをだますなんてあんまりむじつの罪つみをきせられていたのです。」

四郎しろうがおどろいて尋ねたずました。

「そいじゃきつねが人ひとをだますなんて偽うそかしら。」

紺三郎こんざぶろうが熱心ねっしんに云いいました。

「偽うそですとも。けだし最ももつひどい偽うそです。だまされたという人ひとは大抵たいていお酒さけに酔よったり、臆病おくびょうでくるくるしたりした人ひとです。面白おもしろいですよ。甚兵衛じんべえさんがこの前まえ、月夜つきよの晩ばん私わたしたちのお家の前うちまえに坐すわって一晩ひとばんじようるりをやりましたよ。私わたしらはみんな出でて見みたのです。」

四郎しろうが叫さけびました。

「甚兵衛じんべえさんならじようるりじゃないや。きっと浪花ななわぶしだぜ。」

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

子狐紺三郎はなるほどという顔をして、

「ええ、そうかもしれませぬ。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちゃんと私が畑を作って播いて草をとって刈って叩いて粉にして練っておいてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿さしあげましょう。」と云いました。

と四郎が笑って、

「紺三郎さん、僕は丁度いまね、お餅をたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。この次におよばれようか。」

子狐の紺三郎が嬉しがってみじかい腕をばたばたして云いました。

「そうですか。そんなら今度幻燈会の時さしあげましょう。幻燈会にはきつといらっしやい。この次の雪の凍った月夜の晩です。八時からはじめますから、入場券をあげて置きましょう。何枚あげましょうか。」

「そんなら五枚お呉れ。」と四郎が云いました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「五枚ですか。あなた方が二枚にあとの三枚はどなたですか。」と紺三郎が云いました。

「兄さんたちだ。」と四郎が答えますと、

「兄さんたちは十一歳以下ですか。」と紺三郎が又尋ねました。

「いや小兄さんは四年生だからね、八つの四つで十二歳。」と四郎が云いました。

すると紺三郎は尤もらしく又おひげを一つひねって云いました。

「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。あなた方だけいらっしやい。特別席をとって置きますから、面白いですよ。幻燈は第一が『お酒をのむべからず。』これはあな
 たの村の太右衛門さんと、清作さんがお酒をのんでとうとう
 目がくらんで野原にあるへんてこなおまんじゅうや、おそば
 を喰べようとした所です。私も写真の中なかにうつっています
 す。第二が『わなに注意せよ。』これは
 わたくしども
 は私共のこん兵衛が野原でわなに
 かかったのを画かいたのです。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

絵えです。写真しゃしんではありません。第三だいさんが『火ひを軽けいべつすべからず。』これは私わたくし共どものこん助すけがあなたのお家うちへ行って尻尾しつぽを焼やいた景色けしきです。ぜひぜひおいで下ください。」

ふたり よろこ
二人は悦よろこんでうなずきました。

狐きつねは可笑おかしそうに口くちを曲まげて、キックキックトントンキックキックトントンと足あしぶみをはじめてしっぽと頭あたまを振ふってしばらく考かんがえていました。がやっと思おもいついたらしく、両手りょうてを振ふって調子ちようしをとりながら歌うたいはじめました。

し ゆき
「凍こみ雪ゆきしんこ、堅かた雪ゆきかんこ、

のほら
野原のほらのまんじゅうはポツポツポ。

よ
酔よってひよろひよろたえもん太右衛門たえもんが、

きよねん さんじゅうはち
去年きよねん、三十八さんじゅうはち、たべた。

し ゆき
凍こみ雪ゆきしんこ、堅かた雪ゆきかんこ、

のほら
野原のほらのおそばはホツホツホ。

よ
酔よってひよろひよろせいさく清作せいさくが、

きよねんじゆうさん
去年きよねん十三じゆうさんばいたべた。」

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

四郎もかん子もすっかり釣り込まれてもう狐と一緒に踊っています。

キック、キック、トントン。キック、キック、トントン。キック、キック、キック、トントントン。

四郎が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が、ひだりの足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこん。」

かん子が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん助が、焼いた魚を取ろとしておしりに火がつききやんきやんきやん。」

キック、キック、キック、トントン。キック、キック、トントン。キック、キック、キック、トントントン。

そして三人は踊りながらだんだん林の中には行って行きました。赤い封蠟細工のほおの木の芽が、風に吹かれてピツカリピツカリと光り、林の中の雪には藍色の木の影がい

ちめん網になって落ちて日光のあたる所には銀の百合が咲いたように見えました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

すると子狐紺三郎が云いました。

「鹿の子もよびましょうか。鹿の子はそりや笛がうまいんですよ。」

四郎とかん子とは手を叩いてよろこびました。そこで三人は一緒に叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿の子あ嫁いほしいほしい。すると向うで、

「北風ぴいぴい風三郎、西風どうどう又三郎」と細い声がしました。

狐の子の紺三郎がいかにもばかにしたように、口を尖らして云いました。

「あれは鹿の子です。あいつは臆病ですからとてもこっちは来そうにありません。けれどもう一遍叫んでみましょうか。」

そこで三人は又叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿の子あ嫁ほしい、ほしい。」

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

すると今度はずうっと遠くで風の音が笛の音が、又は鹿の子の歌かこんなように聞えました。

「北風ぴいぴい、かんこかんこ

西風どうどう、どっこどっこ。」

狐が又ひげをひねって云いました。

「雪が柔らかになるといけませんからもうお帰りなさい。今度月夜に雪が凍ったらきつとおいで下さい。さっきの幻燈をやりますから。」

そこで四郎とかん子とは

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」と歌いながら銀の雪を渡つておうちへ帰りました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒